

『宗教及び文藝』に見る明治末期のキリスト教の一側面

星野 靖二

1. はじめに

本稿は、植村正久⁽¹⁾が1911(M44)年に創刊・主宰した『宗教及び文藝』というキリスト教雑誌⁽²⁾について考察を試みるものである。

植村は同誌に法然論である「黒谷の上人」やブラウニング論である「杜鵑一聲——ピッパの歌」といった論文を寄せており、前者は仏教という宗教伝統や日本的なるものに対する植村の態度をよくあらわすものとして、また後者は植村と英文学との関わりを示すものとして、植村研究においてしばしば触れられてきた。

しかし、こういった植村の個別の論文が考察の対象となることはあっても、『宗教及び文藝』に寄せられた他の論者の文章や、また雑誌全体の性格については、あまり考察の対象となつてこなかったといえる。

これには、同誌が一年八号という短い期間で発行を終了しているということや、明治後半以降の植村の晩年についての研究が相対的に少ないこと⁽³⁾も関係していると思われるが、それに対して本稿は、植村研究の文脈を念頭に置きつつ、より広く同誌の雑誌としての方向性や位置付けについて、明治末期におけるキリスト教界の状況⁽⁴⁾と相関させながら考察を加えたい。

2. 植村正久と『宗教及び文藝』

前述したように『宗教及び文藝』の性格そのものを取り扱う考察は多いとはいえないが、従来の植村研究の文脈で論じられてきた『宗教及び文藝』の位置付けを武田清子の評に代表させて見ておく。

武田清子による評： 武田清子は復刻『宗教及び文藝』に寄せた解説で、同誌は《1》文化的領域に対する宗教の働きという植村の基本的な問題意識が現れたもので、それは《2》大正デモクラシーへと向かう時代思潮に対するキリスト教からの思想的・学術的問題提起という位置付けにあり、内容においては《3》若いプロテスタント学徒の業績が紹介され、また《4》「黒谷の上人」において土着的思想との接続の問題が取り上げられているとしている⁽⁵⁾。

これらは基本的に首肯されるものだと考えるが、例えば《1》で述べられているような問題意識が植村の生涯を通して一貫しているとしても、その現れにおける変遷にも目を向ける必要があると考える。即ち、宗教的なるものが文化的なるもの⁽⁶⁾にどのように関わっていくべきだと考えられていたのか、またそれが時代的な状況との関わりの中でどのような形で主張されていたのかという点を以下見ていく。

『日本評論』と『宗教及び文藝』： その意味では『宗教及び文藝』の性格を同時代的状況の中に位置付け、それを植村が同誌に託した意図と照らし合わせる必要があると思われるが、従来『宗教及び文藝』の性格については、『日本評論』という植村が1890(M23)年に創刊した雑誌の性格

を引き継ぐものとして触れられることが多い。

この『日本評論』は、植村が主にキリスト教徒に向けて発信していた『福音週報』・『福音新報』といった雑誌と対比的に、宗教的なるものと文化的なるものの関わり合いに焦点を合わせてキリスト教界外への発信も視野に入れた雑誌として論じられてきているが⁽⁷⁾、ここで改めて植村自身の言葉において『日本評論』に託した意図を見るならば、創刊号に掲載された「日本評論の発行について」で以下のように述べられている：

余輩は此の多事多望前途頗る患難なる今日の日本国に於て、一の特殊なる天職を奉ずるものなるを知る。余輩は政治文学社交経済及び教育上の事物に関し、世人に論告すべき意見を懐抱するものなり。殊に吾国現在及び将来の宗教に付ては、其真偽利害に関し、切に信し、深く悟り、熱心に冀望する所のものあり⁽⁸⁾

このように、『日本評論』では「政治文学社交経済及び教育上の事物」そして「宗教」に対する評論活動を行っていく旨が述べられるのであり、実際に植村は文学から時事評論まで様々な主題について広範に論じることになる⁽⁹⁾。

また同誌の中心的な執筆者は植村であったが、他にも板垣退助・大井憲太郎・植木枝盛といった政治家や、三宅雄二郎や中江兆民といった文筆家からの寄稿を受けており⁽¹⁰⁾、更に誌面構成においても、論文や書評以外に詩歌や小説が掲載される一方で、時事欄において政治や時事についての評論が行われていた。このように見るならば、『日本評論』には社会的な物事に対してキリスト教徒としてどのように関わっていくのかという問題について、当時の植村が望ましいと考えていた姿勢、即ち文芸や思想の問題に加えて政治や社会等の時事問題にも積極的に目を向けて論じていくという姿勢が表されていたとすることができる。この姿勢が単純にキリスト教界の外部に向けた方便としての姿勢ではなかったことは、同時期にキリスト教徒向けとして創刊された『福音週報』にも同様の姿勢が見ることができると⁽¹¹⁾からも理解することができるだろう。

そしてこのような姿勢は、『日本評論』が「政治社会経済及文学之評論」を表紙に掲げた『国民之友』のような総合雑誌を目指していたとされていること⁽¹²⁾を考え合わせるならば、明治二十年代の総合雑誌の読者たる青年達に対して発信されたものであり、また彼らによって望ましいものとして受け取られていたと考えることができるのである⁽¹³⁾。

では、これが『日本評論』創刊当時の明治二十年代前半において植村がキリスト教界の内外に向けて発信したキリスト教徒のあるべき姿であるとするならば、それは時代の経過につれてどのように連続し、また変化していったのだろうか。

3. 明治末期とキリスト教

具体的に『宗教及び文藝』でどのような議論が行われたのかを見る前に、同誌が創刊された1911年前後のキリスト教とその社会集団たるキリスト教会（端的には植村の関わった日本基督教会）がどのような状況にあったのかを、『日本評論』発刊当時の明治二十年代の状況を参照しつつ概観しておく。

(1) 日本基督教会の形成

大内三郎は、植村正久が教会形成以外の多様な活動にも目を向けていたことを認めた上でその生涯を教会、すなわち植村が指導的な立場にあった日本基督教会の形成と関連付けて考察してい

るが、その際に植村の生涯を四区分し、それぞれ準備期（1858-1889）、第一期（1890-1894）、第二期（1894-1908）、第三期（1908-1925）としている⁽¹⁴⁾。

これは即ち 1890(M23) 年にそれまでの日本基督一致教会が信条・憲法を改正して日本基督教会という新しい組織になったことを一つの出発点とするものであり⁽¹⁵⁾、その教会形成事業の画期として 1894(M27) 年に日本基督教会大会の伝道局が独立したことによって同教会が直轄の伝導局を所有するようになったことや、また 1904(M37) 年に東京神学社が設立されることによって同教会が公式の伝道者養成機関を確保したこと等が指摘されている。そして 1905(M38) 年に外国ミッションから独立して同教会が自給独立を達成したことを重要な転回点として、最終的に 1908(M41) 年頃、即ち上述の第二期の終わり頃には植村が生涯をかけて取り組んだ「教会形成という事業が一応終結するとみる」と大内は述べている。

このように見るならば、1890(M23) 年頃から 1908(M41) 年頃にかけて、日本基督教会は制度や組織形態において自律的な集団として構築されつつあったとすることができる。即ち 1890(M23) 年に創刊された『日本評論』が教会形成事業の開始という状況下において出されたものであるならば、『宗教及び文藝』の創刊は 1911(M44) 年という日本基督教会の機構は一通り整備された後のことであったとすることができる。

この教会形成事業が達成されたことと『宗教及び文藝』の位置付けの関係については内容の考察と合わせて後段で見ていくが、ここでは同誌の寄稿者に東京神学社と関係が深いものが多かったことを先取りして指摘しておく。もちろんこれによって同誌の影響力が日本基督教会の内部にのみ留まっていたと限定することはできないが、それでもやはり同教会と切り離して同誌の性格を考察することはできないだろう。それでは社会集団としての同教会はどのような特徴を持っていたのだろうか。次に同教会を構成していた信徒層の性格について考察していく。

(2) 日本基督教会の信徒層

日本基督教会が組織として誕生した 1890(M23) 年から『宗教及び文藝』が創刊される 1911(M44) 年にかけて、同教会の大会報告に依って基礎的な統計を確認しておく：

表 1：日本基督教会の信徒数と日曜学校生徒数の動向⁽¹⁶⁾

西暦	教会員	受洗者	除名者	西暦	教会員	受洗者	除名者	生徒数
1890	10,495	n/a	n/a	1900	11,117	675	288	n/a
1891	11,253	748	301	1901	11,851	1,182	350	5,822
1892	10,862	885	474	1902	12,467	1,187	257	未詳
1893	11,118	1,296	734	1903	13,511	1,506	612	8,183
1894	10,787	701	503	1904	13,931	1,062	556	8,961
1895	11,064	494	未詳	1905	15,076	1,441	273	8,913
1896	11,324	845	321	1906	16,346	1,820	345	11,032
1897	11,131	683	未詳	1907	18,157	2,289	516	11,318
1898	10,609	780	693	1908	19,568	2,108	446	6,595
1899	10,849	758	481	1909	19,838	1,827	1,041	10,215
				1910	21,219	1,947	461	11,171
				1911	21,917	1,799	650	13,771

これを見ると、1890(M23)年から1900(M33)年頃までは1898(M31)年の10,696人を最低値としてほぼ横ばいであり、これは日本の総人口がほぼ一定の伸び率で増加しつつあったことと比べるならば（分布などを無視した統計としての意味しか持たないにせよ）僅かながらではあるが減少傾向であったことを示している⁽¹⁷⁾。その一方で1901(M34)年に上昇に転じ、1902(M35)年から目に見えて増加していくのである⁽¹⁸⁾。

このような教勢の展開の要因として、まずキリスト教批判の風潮を考えなくてはならない。日本基督教会成立の1890(M23)年前後には、欧化主義に対する保守的な反動、また1891(M24)年の内村鑑三不敬事件とそれに対する仏教雑誌・新聞によるキリスト教攻撃⁽¹⁹⁾、更に1893(M26)年の『教育ト宗教ノ衝突』問題などがあり、これらに対して植村は反論したにせよ⁽²⁰⁾、大勢としてはキリスト教に対する逆風が吹いていたといえる。

こういった風潮や経済的な不況があいまって従来から行われていた農村への伝道が行き詰まりを見せており⁽²¹⁾、それを受けて日本基督教会は都市、更に言えば都市中間層への伝道に焦点を合わせた教会として組織作りを行いつつあった。その転機を田代は明治二十年代中葉、即ち日本基督教会成立前後であるとしている⁽²²⁾。このような転換は時代状況に対する組織防衛としての対応でもあったが、大内はこれに先行する形で植村が都市伝道を戦略的に志向していたと論じている⁽²³⁾。

いずれにせよ、日本基督教会は都市中間層を主な伝道の対象としていくわけであるが、その方策として青年層への教育の側面に重点が置かれるようになっていく。既に井門が論じているように、伝道の対象たる都市中間層が自らの子弟の教育を望んでいたことと相乗的な形で、この時期のキリスト教会は教育活動に焦点を合わせつつあったのであり⁽²⁴⁾、信徒数が増加に転じていく1901年から日曜学校の生徒数が統計に記載されるようになったことは示唆的だといえるだろう⁽²⁵⁾。即ち1900年代の信徒増加は、学生などの都市中間層という新しい信徒層⁽²⁶⁾への移行を意味していたのである。

4. 『宗教及び文藝』

そのような中で創刊された『宗教及び文藝』は、そういった新しい信徒層との関わりの中で捉えられなくてはならないだろう。以下、そういった人々に対して『宗教及び文藝』が何を発信しようとしていたのかを、そういった人々が何をキリスト教に求めていたのかという問いを視野に入れて考察していく。

(1) 『宗教及び文藝』の創刊

『宗教及び文藝』創刊号には、前述した『日本評論』の「日本評論の発行」にあたるような創刊の意図を明快に述べた文章を見ることはできないが、しかしながら『福音新報』に掲載された『宗教及び文藝』の発刊に関する広告に以下のように述べられているのを見ることができる：

今や世界の宗教的思想及び文学は日に月に新面目を開展し、我が国の要求も亦一層系統的根本的な思想の産物を促すこと日久しく、我等の基督教文学の事業一步を進むべき必要切迫したるを知る。微力にして且つ多忙なる我等の成し居る所理想に遠きを知ると雖も、進歩的研究的態度を以て倦怠の気を却け、敬虔の精神を原として神の国の拡張に貢献する所あらんとす。且つ余り専門的に偏せず教養ある一般の読者に利益と興味を与へんこと

を期するが故に次第に改善を加へ内容を充実し力めて多方面なるものとせんと欲す。(27)

ここで植村は『宗教及び文藝』は「余り専門的に偏せず教養ある一般の読者」を読者として想定するとしており、まずこの「一般の読者」に上述の都市中間層を重ねて考えることができる。そしてこの「一般の読者」をキリスト教界の外にも想定するならば、前述の『日本評論』創刊の意図と連続するものを見出すことができるだろう。実際に『日本評論』の創刊が都市伝道を主眼とした教会形成へと方針を定めていく頃であったことを考え合わせるならば、その読者として想定する対象がまったく同じものではなかったにせよ、少なくとも断絶はなかった、とひとまずはいうことができるだろう。

しかしその一方で、『日本評論』が「総合評論」雑誌を目指して政治・文学・社交・経済・教育・宗教といった広範な問題を扱おうとしていたのに対して、『宗教及び文藝』の広告では同誌が「宗教的思想及び文学」や「基督教文学」をまず問題とするものとされていた。それでは、このように述べられる同誌にはどのような寄稿者がどのような文章を寄せていたのだろうか。

(2) 『宗教及び文藝』の概観

論文とその寄稿者： まず寄稿者・執筆者についてであるが、同誌に主だった論文を寄せている論者（とその論文数）を列記するならば、植村(8)以外に柏井園(10)、石原謙(5)、田中達(5)、川添万壽得(3)、斉藤勇(3)、南薫造(3)、高倉徳太郎(2)、大谷虞(1)、小崎弘道(1)、日野真澄(1)、和田琳熊(1)といった名前を挙げるができる(28)。

これらの寄稿者は全員キリスト教徒であり、小崎弘道・日野真澄・和田琳熊ら組合教会所属者も寄稿しているものの、やはり日本基督教会の関係者が多いことを指摘できる。また前述のように武田は若いプロテスタント学徒の業績の紹介を同誌の特徴として指摘していたが、年齢的には五十代にさしかかった植村と小崎を別にして、柏井・田中・川添等四十歳前後の者達と石原・斉藤・高倉等二十代の者達に大別されている。後述するように前者の四十歳前後の者達が同誌の中心となっていたわけであるが、想定していた読者層に近いような後者の者達からも寄稿があったということも特徴として押さえておかななくてはならないだろう。

続いてこれらの論文の内容を概観するならば、上述した植村のブラウニング論である「杜鵑一聲——ピッパの歌」(5号)以外にも文学や絵画についての文章も見ることができるもの(例えば斉藤や南の寄稿)、植村の一連の「ヨハネ第一書」講解(1-6号)や、柏井の一連のパウロ論である「保羅の神学と救拯の勢力」(1,2,4,7,8号)といった聖書講義やキリスト教神学に関する議論を主要なものとして指摘することができる。

またこういったキリスト教についての考察に加えて、実質的な内容としてはキリスト教が取り扱われるにせよ、宗教そのものについて論じているものもあり、それは例えば高倉徳太郎「宗教の本質に関するシュライエルマッヘルの思想」(2,3号)や和田琳熊「宗教における抽象と具象」(4号)、また日野真澄「宗教生活に於ける感情の要素」(5号)等に見ることができる。

そしてそういった宗教の本質を思索的に掘り下げていく試みの一方で、田中達は例えば「歴史上の釈迦と基督」(3号)に見ることができるような比較宗教的な論考——結論としてはキリスト教の弁証につなげられることが多いが——を幾つか寄せている。また石原謙のキリスト教史研究の最初期のものである「羅馬に於けるシーザー崇拜と基督教」(4-6号)もキリスト教という宗教伝統の歴史的な検討を行うものとして考えることができる。

このように見るならば、『宗教及び文藝』の諸論文にはキリスト教そして宗教そのものを学的に考察していこうとする姿勢があることを、その一つの特徴として指摘することができるだろう。

誌面構成と執筆者： 続いて誌面構成に目を向けるならば、こういった論文が巻頭から4～6本程度載せられ、続いて同時代の国内外の思想界の動向についての短評である「思想界の消息」欄、そして書評を行う「批評及紹介」欄が続くという形が取られていたのを見ることができる。

この「思想界の消息」欄と「批評及紹介」欄の内容については後で考察することとして、その執筆者に目を向けるならば、まず第一号から第三号までは無署名記事が多い。『日本評論』や『福音新報』など他の雑誌に植村が無署名で多くの文章を表していたことを考えれば、これらの中に植村の手になる文章も含まれていたかと思われる。続く第四号以降、両欄はわずかな無署名記事を除いて基本的に署名記事になるが、そこでは柏井園、田中達、川添万壽得らが中心的な執筆者となっているのを見ることができる⁽²⁹⁾。上述の論文の本数を考え合わせるならば、確かに主宰者は植村であったが、同誌の中心人物はむしろ柏井園であり、また田中達や川添万壽得であったといえるだろう。

(3) 中心的な執筆者達

では同誌の中心的な執筆者であった柏井・田中・川添は同誌にどのような論文・記事を書いていたのだろうか。以下、彼らの個人的な背景にも目配りしながら考察していく。

○ **柏井園**： 柏井園(1870.7.22-1920.6.25)は土佐国に生まれ、尋常中学から高知共立学校に転学(1883(M16)年)し、そこで同校の教師であったグリナンから洗礼を受け、1887(M20)年に卒業している。その後同志社普通学部に進んで1891(M24)年に卒業、高知に戻って高知英和女学校で教鞭を執った後、1893(M26)年に植村正久の紹介で明治学院の講師として上京し、また『福音新報』に関わった。その後1903(M36)年に来日していたユニオン神学校校長との間で話がまとまって、同年にユニオン神学校に留学、1905(M38)年に帰国した後、明治学院を辞して東京神学社の教頭となり、没するまでその職にあたった⁽³⁰⁾。

1914(T03)年の『基督教史』等、文筆活動でも知られており、『福音新報』や『宗教及び文藝』に多くの寄稿を寄せている。また1906(M39)年に、個別の青年会で発行されていた機関誌を合併する形で基督教青年会同盟の機関誌として『開拓者』という雑誌が創刊されているが、柏井は当時同同盟の幹事であったこともあって、その初代編集長に就任して健筆を振った⁽³¹⁾。更に『宗教及び文藝』の刊行が途切れた後の1914(T03)年、柏井が初代編集人となって『文明評論』という雑誌が発行されるが、その創刊号の冒頭に「『文明評論』は]新たなる起源と多少別なる目的を有せる」ものであるが、「今や両誌『宗教及び文藝』と『文明評論』合併の議なり、名誉ある『宗教及び文藝』の将来に期せし志を継ぐものだと述べられることになる⁽³²⁾。

『宗教及び文藝』ではまず、論文「保羅の神学と救拯の勢力」を五回に渡って連載し、「救拯」の問題について論じている⁽³³⁾。柏井は「救拯」とは「個々の心靈の救拯」を主とするものとしながら、なおそれが社会の「救拯」につなげられなくてはならないとし、それこそが「社会に対するプログラムを有する神学」⁽³⁴⁾の果たすべき役割だとする。

しかし、柏井は直接的に社会改良を旨とする運動に従事するという意味で「社会の救拯」を考えているのではなく、「個々の心靈の救拯」とそれを可能にするところの信仰がまず為されなくてはならないと考えていた。そして、ここで柏井がいう信仰が、感情的側面においてのみ追求される

べきものとしてではなく⁽³⁵⁾、学問的に探求する必要性が主張されるどころ——逆にいうならば柏井にとって学問的な探求は究極的に信仰に到達する——に特色がある。

時代はやや遡るが、学生に向けられた「学生生活と宗教」⁽³⁶⁾という文章で柏井は、以下のように述べている：

学生時代は研究の時代なり疑問の時代なり。其の宗教にも亦研究なかるべからず、疑問なかるべからず。研究し疑ひて後一片の信仰に到着すれば、其の信条は単純なるも可なり、否単純なる最も可なり、之に抛りて立ち、之を明にせんがために煩悶し、之を世に行はんために戦へよ⁽³⁷⁾。

ここで柏井は「煩悶」して「宗教」を学問的に様々な形で「研究」すること、そしてそれを通じて「信仰に到着」することが重要であるとし、「世」すなわち社会との関わりにおいては、戦ってでもそういった「信仰」を行っていくことにまず主眼が置かれることになる。柏井に信仰と学問の調和という考え方が見られたのは前述した通りであるが、ここで宗教の学問的な研究は確固たる信仰へとたどり着く為の階梯として位置付けられ、またそれが学生に対して明瞭に提示されているのである。

このような学術と宗教の関係の捉え方に、両者の調和を訴える植村の議論からの影響を見ることもできるだろう⁽³⁸⁾。しかしその一方で、植村が学術というものを論じる場合に自然科学をも含めた学術一般を念頭に置くことがあったのに対し、ここで柏井が論じている学術は神学、即ちキリスト教の本質を探究する人間の知的な営みにより焦点を当てるものだったということが出来る。

再び『宗教及び文藝』における柏井に話を戻すならば、まず「思想界の紹介」欄では千里眼問題やイタリアで開催された第四回万国哲学学会の様子、また今岡信一良と加藤直士の間で交わされたキリスト教をめぐる論争など、同時代に於ける宗教や思想をめぐる問題が取り上げられている一方で、社会評論や時事問題を論じている文章は見られない。また、「批評及紹介」欄では神学書が多く扱われている。このように見るならば、柏井の視野の中に社会の問題が含まれているとしても、まず第一に述べられていたのは（ただ信仰でもなく、またた学問的研究でもなく）個人の信仰を確立する為の学問的研究の必要性であった。そしてその研究は信仰を客観的に提示するものとして再び社会に対する働きかけを為す可能性がある——とりわけ「神学」において——のであり、その点において個人の信仰と社会の「救拯」との往還が捉えられていたということが出来るだろう。

○ 田中達：田中達(1868(慶應4.4.4)–1920.6.3)は、紀伊国、真宗勝専寺住職志場家に生まれ、1883(M16)年から本願寺学寮で漢籍、仏典を学んでいる。田中は植村正久の妻である山内季野の甥であり、この季野の兄である山内量平が宣教師ヘールから受洗(1886年)した後に受洗したという⁽³⁹⁾。その後田中は1886年に上京して田中家を継ぎ、『日本評論』・『福音新報』の編集にあたった後、教文館翻訳主任等を経て、1902(M35)年に米国ハートフォード神学校に留学。続いてトリニティー大学に学び、1905年に帰国し、東京神学社教授となった。文筆活動としては著書・訳書等多く、また柏井の『文明評論』にも多く寄稿している。

『宗教及び文藝』に比較宗教的な論文を寄せていたことは前述したが、「思想界の紹介」・「批評及紹介」両欄では仏教や回々教などキリスト教以外の宗教伝統にまつわる文章も見ることがで

きる。これは田中の漢籍・仏典の素養と合わせ、多分に同時代的であった比較宗教という視点を持っていたことからくるものでもあろう。

田中は同誌上の論説においてマックス・ミュラーやリス・デイヴィス、ティーレ等欧米の宗教研究に言及する事も多く、1909(M42)年の著作である『比較宗教雑話』に所載の「宗教学界の三偉人」という論考では「三偉人」にマックス・ミュラー、ルナン、ティーレを挙げている⁽⁴⁰⁾。

また『比較宗教雑話』の冒頭で自身の「比較宗教」の立場に関して、厳密な意味での「比較宗教」を「宗教史と宗教哲学の中間」にあって「宗教史の蒐集したる材料を取捨選択して、宗教学最高の目的たる宗教哲学へと之を送付するものなり」とする。田中はこういった「比較宗教」を狭義のものとするならば自身の「比較宗教」はより広い立場に立つとするものの、「取捨選択」すなわち歴史上の宗教に対する価値判断に目が向けられているのを見ることが出来る⁽⁴¹⁾。

そして田中の叙述の論理展開においては、この「取捨選択」が結果的にキリスト教の弁証につなげられることになる。例えば『宗教及び文藝』に論文として寄せられた「歴史上の釈迦と基督」は釈迦とキリストを伝記・教義・感化の点から比較するものであるが、釈迦に一定の地位を見出した上で、「基督の地位に比しては、釈迦の地位の低きを感じずんばあるべからざるなり」と結論するのであり⁽⁴²⁾、また同じく論文である「宗教缺くべからず」は「近代を以て科学万能の代と見るは誤まりであって宗教の必要性を主張するものであるが、進歩的・世界的・包括的・文明的といった理由を挙げてキリスト教のみが将来の宗教たりえると論じているのである⁽⁴³⁾。

このような姿勢は、別に単著として著された仏教論や神道論⁽⁴⁴⁾においても見られ、それは田中の議論の一つの基調を為すものだと考えることができるが、同時に田中は日本の同時代の宗教研究にも広く目を配り、またそれを『宗教及び文藝』の読者に教示しようとしていた。それは例えば、姉崎正治が1910年7月に刊行した『根本仏教』に対して書評論文を寄せ、「種々遺憾の点も存すれど、従来仏徒の著せる仏教書に比しては嶄然一頭地を挺んでしもの」と論じていたり⁽⁴⁵⁾、また「批評及紹介」欄で井上哲次郎のものを堀謙徳が増補して1911年に出版した『釋迦牟尼小傳』を取り上げて「史実を公平に研究せんとする人に取りては、この書は蓋し最も適當のもの」と評していることに見ることが出来る⁽⁴⁶⁾。

ここで田中は、複数の宗教伝統を比較するという学問的な営み(＝比較宗教)によって正しい宗教(結論としてはキリスト教に重ねられる⁽⁴⁷⁾)にたどり着くことができると考えていたわけであり、これは柏井が宗教の本質に関する学問的な探求が信仰の獲得につながるとしていたことと連続的に捉えることができるだろう。即ちここでも学問的探求は宗教(＝キリスト教)と調和的であり、またそこに導かれてゆくものとして提示されているのである。

○ 川添万壽得 : 川添万壽得(1870.10.20(M03.9.26)–1938.7.11)は土佐国に生まれ、1888(M21)年に受洗して高知教会に所属している。1892(M25)年に上京して明治大学神学部に入學、1896(M29)年の卒業後長野県佐久郡で伝道を行い、1897(M30)年に按手礼を受けている。そして1902(M35)年から米国オーバン神学校に学び、1905(M38)年に帰国。その後は東京三田で伝道を行いながら『福音新報』に関わっていた。また『宗教及び文藝』創刊当時は東京神学社で講師を務めていた。

川添は1910(M43)年から始められた新約聖書の改訳委員に選出されており、1917(T06)年に完成するまで改訳事業に関わっていた。それを受けて『宗教及び文藝』に寄稿された論文も聖書

の改訳事業に関するものが多い⁽⁴⁸⁾。また同時代の英語圏の神学書や説教集を「批評及紹介」欄において書評している。

これらの論文や書評以外に、川添は興味深い文章を『宗教及び文藝』に寄せている。それは「牧師の書齋に備ふべき近刊書」⁽⁴⁹⁾というもので、留学していたオーバン神学校（＝「オーボルン神学校」）の学報から、同校の教授陣が様々な分野において推薦している神学書の一覧に川添が手を加え、更に川添自身が推薦する書籍を加えたものである。このリストに英語圏の書籍が多いことは川添自身も指摘しており、その後大正期の神学研究においてドイツ系の神学が影響力を持っていくようになることを考え合わせると興味深い。しかし、ここで注目したいのは、この一覧を掲載することが「教役者講学の葉」となる、としていることである。

すなわち川添は、読者のすべてではないにせよ、その中の一部に神学の研究を行いたいと考えている人々が存在することを前提とし、そういった人々に対して神学研究の指針を示していることができる。このような川添の執筆者としての姿勢は『宗教及び文藝』の性格付けを考えるための一つの材料とすることができるだろう。

(4) 学術雑誌としての『宗教及び文藝』

従来総合雑誌を目ざしていた『日本評論』とのつながりで論じられてきた『宗教及び文藝』であるが、このように見るならば、キリスト教や宗教についての学的な研究に焦点を合わせ、それについての論文そしてまた書評や時評を掲載する今日的な意味での学術雑誌に近いものとして捉えることができるように思う。

それは『日本評論』の誌面構成との比較でいえば『宗教及び文藝』の論文・「思想界の紹介」欄・「批評及紹介」欄という誌面の体裁において、「思想界」と離れた時事問題や社会評論を取り扱うことのできる場がないということに始まり、また内容においても上述してきた柏井・田中・川添らが同誌に執筆した文章の性格からそれを見て取ることができるだろう。

ここで両者の違いを指摘することで、植村正久の時事問題や社会評論に対する態度が根本的に変化したと主張したいわけではない⁽⁵⁰⁾1890年に創刊された『日本評論』と1911年に創刊された『宗教及び文藝』は、主宰者たる植村の意図やその内容において共通する所があるにせよ、やはり同じ文脈で語ることはできないと考える。ここで問われるべきは何故『宗教及び文藝』は総合雑誌ではなく学術雑誌という体裁を取っているのか、ということだろう。以下、《神学研究の勃興》と《宗教の探求》という相互に関連し合う二つの事柄を提示して、学術雑誌としての『宗教及び文藝』を同時代的な文脈の中に位置付けてみたい。

○ 《神学研究の勃興》： 上記で挙げた『宗教及び文藝』の中心的な執筆者である柏井・田中・川添らは、皆1902～5年頃に米国の神学校に留学して神学を学び、帰国した後に創立間もない東京神学社（1904年開校）にそれぞれ関わることになる⁽⁵¹⁾。前述したように、東京神学社は日本基督教会の伝道者養成機関として設立されたという背景を持つが、創立後すぐに柏井等学識豊かな教授陣を揃えたことに、校長であった植村の伝道者養成への意気込みと、その養成における知的な側面の重視を見て取ることができるだろう。

そこで柏井等は教育活動に携わっていたのであるが、同時にその著作や『宗教及び文藝』上の論文に見られるようにキリスト教の学的な研究を行ってそれを発表をしていた。その意味で東京神学社は教育の場であると同時に研究の場でもあったといえる。

ここで神学の研究ということについて日本のキリスト教界一般に目を向けるならば、佐藤敏夫は「一九〇七年以後の時期は、日本における神学研究がようやく本格化して行った時期に相当」とし、植村や内村鑑三らの初代信徒の次の世代による学問的著作が、明治四十年代に入ってから神学校ではない官学校と神学校の両方から出はじめたことを指摘している⁽⁵²⁾。

まずこの時期の官学における研究の代表者として挙げられているのは波多野精一・石原謙らであり、波多野は日本における学的なキリスト教研究の嚆矢であるといわれる『基督教の起源』を1908(M41)年に刊行している⁽⁵³⁾。

またその一方で神学を学ぶ者達からも様々な形で業績が著されていくことになるが、『宗教及び文藝』が創刊された1911年前後に絞って見るならば、例えば柏井園『基督教小史』(1909年)、富永徳麿『基督教新解』(1909年)、村田勤『宗教改革史』(1909年)、高木壬太郎『基督教大辞典』(1911年)、今井寿道『旧約聖書神学』(1911年)⁽⁵⁴⁾等といった著作が著され、更に『神学之研究』(1909年創刊)や『宗教世界』(1912年創刊)、また『神学評論』(1914年創刊)といった『宗教及び文藝』と同様、神学研究を取り扱う雑誌が創刊されていることを指摘することができる⁽⁵⁵⁾。

またキリスト教文書を発行する為の超教派的なミッション協力組織である日本基督教興文協会が1913年に成立しており、後に柏井や田中の著作がここから刊行されることになる⁽⁵⁶⁾。

このように見るならば『宗教及び文藝』、そして同誌と密接な関わりを持っていた東京神学社という教育・研究機関は、当時の日本キリスト教界にある程度共時的に見られたキリスト教神学の研究への取り組みの中に位置付けて考えることができるだろう。

○ 《宗教の探求》 : では、何故このような神学についての研究がこの時期に行われるようになったのだろうか。明治初期からのキリスト教についての研究の蓄積の上により深い考察が成立するようになったという背景もちろんあり、それは個別の教派やそれぞれの神学校に即してより詳細に考察されなくてはならないが、ここでは神学の研究を行う者達、そしてその研究を受け取る者達が、とりわけこの時期においてどのような意識を持っていたのかについて見てみたい。

当時26歳であった高倉徳太郎は、同誌に「宗教の本質に関するシュライエルマッヘルの思想」という論文を寄せているが⁽⁵⁷⁾、同論文は1910(M43)年に東京神学社に提出された卒業論文の一部であり、高倉は東京帝国大学の法科を中退して東京神学社に転じたという経歴を持つ。この方向転換の転機となったという植村と高倉の会話を三松俊平が以下のように回顧している：

[高倉 [T] は相談があつて植村 [U] を訪ねてきたという]

…前略…

[T] 「僕に取りましては、困る問題が起きたのです」

[U] 「その困るといふ問題は、何ですか。」

[T] 「僕は宗教上の書物が読みたいのです」

…中略…

[T] 「僕は学校の課業よりも、信仰の問題の方に興味が多くなって、気が変になって来たのです。」

…中略…

[T] 「僕は何だか心を信仰のことに強く引き着けらるる心地がします。之を如何にしたら可いか、悩んで居るのです。」

…中略…

〔植村はそれを高倉が「方向を転換」して「信仰の道に専心従事」するようにという神の
宿命だとし、高倉はそれを是としたという〕⁽⁵⁸⁾

もちろん回顧であるから額面通りに受け取るわけにはいかないが、高倉が「学校の課業」より「信仰の問題」を重要なものとして捉え、「心を信仰のことに強く引き着けらるる心地」に悩んでいたということを見て取ることができる。

これを同時代の学生の問題として考えるならば、その典型を藤村操に見ることができるように日露戦争前後の明治末期において自我の問題に悩むいわゆる煩悶青年が登場してきたことを指摘できる。もちろん当時の青年の中には、例えば大逆事件(1910年)による弾圧にみられるように自己と社会との関わりに目を向ける者達も存在していたのであるが、ここで自己の内面における「信仰の問題」に焦点を合わせるならば、やはりそういった煩悶青年とそれに対応する形で生じてきた修養という運動に目を向けなくてはならないだろう。

この修養運動は一般に人格の陶冶に主眼を置いた複合的な運動として捉えることができるが⁽⁵⁹⁾、そこでしばしば宗教なるものに焦点が当てられることになる。これはキリスト教という宗教伝統に関わる青年達にも無関係ではなかったのもあって、前述の基督教青年同盟会の機関誌である『開拓者』には1910年から「修養」という欄が新設され「平信徒として知名の人に信仰談、日常の修養法を伺い毎号掲載」されている⁽⁶⁰⁾。

そうした修養運動の中には綱島梁川に典型的に見られるように精神主義的・神秘主義的な傾向を強く持つものもあり、それらは「感情主義」としてその反理性的・反道徳的性格を批判されることもあったという⁽⁶¹⁾。それに対して高倉もまた自己の内面の問題に悩む煩悶青年の一人であったが、その「信仰の問題」への取り組みが、上述引用で「宗教上の書物」を読むことを欲していたとしていたように、その学的な探求と切り離すことができないものであったことを指摘することができる。これを『宗教及び文藝』との関連で見ると、高倉が宗教に対して内面・心情的な「信仰」とそれに対する学的な探求を一体のものとして求めていたという姿勢は、上述した柏井や田中の論述に見られた望ましい宗教とその探求のあり方と呼応するものであり、更に高倉自身も神学研究的論文を同誌に寄稿することによって、その姿勢を読者に提示していたことができる。

5. おわりに

このように見るならば、まず『宗教及び文藝』創刊当時の1911年という時代においては、自己の内面に問題を抱える若者が一定数存在しており、この段階で同誌が読者として想定していた都市中間層には学生を典型としてそういった若者が含まれていたということができる。

彼らのうちのあるものはその煩悶に対する答えを修養運動の中でも神秘的な方向に求めるのであるが、それに対して本稿では『宗教及び文藝』を学術雑誌として規定し、そういった若者達や、また彼らに実際に対応する教役者達に対して、キリスト教の信仰とキリスト教の本質についての学的な探求が一体のものとして提示された側面があったことを指摘した。そしてまた『宗教及び文藝』にはそういった提示を望ましいものとして受容した若者が、自らの研究を発表することで今度は発信する側にまわるという循環が見られたことも指摘した。

この循環を東京神学社という神学の教育・研究組織と関連付けて捉えるならば、その神学研究の位置付けを日本基督教会という教会組織の特徴の一つとして捉えることができる。更に信仰とその学的な探求の調和という基本的な認識が植村—柏井—高倉といった指導的な個人において受け継がれ、発信されていったものとして捉えるならば、『宗教及び文藝』という雑誌は、それ自体は短命に終わるものの、その前後における日本基督教会の展開においてある程度の一貫性——植村と柏井の違いについて前述したように完全に重なるわけではない——を持つ特徴をよく体現するものとして考えることができるだろう。

その一方で上述したように神学研究の勃興はキリスト教界に共時的な出来事であったのであるが、これを宗教なるものの探求というより広い問題に再びつなげて考えるならば、当時宗教をめぐる神秘的なるものと学的なるものが絡み合った地点が問題とされていたということに目を向けなければならない。

同時代においてその神秘主義的な傾向を指摘されることがあった綱島梁川も、その宗教・キリスト教に対する思索の展開の過程において、信仰と理性の関係を問題としており⁽⁶²⁾、またそれは当時綱島にひかれていた今岡信一良が「宗教の本当のところをつかんでいるような、超能力というような神秘ではなく、哲学と一致するような神秘というものに、憧れたつもりなのですがねえ」⁽⁶³⁾と回顧していることにも見て取れる。

すなわち当時において、「神秘的なるもの」のみ、もしくは「学的なるもの」のみに還元し尽くされないところに宗教が追い求められていたのであり、その一端は宗教哲学の試みへとつながっていく——西田幾多郎の『善の研究』は『宗教及び文藝』の創刊と同じ1911年に出されている——のである。この問題について本稿でこれ以上取り扱うことはできないが、大正教養主義との位置関係を含めて更に考察されるべき問題だと考える。

註

- (1) 植村正久(陰暦1857(安政四年).12.1[太陽暦1858.1.15]—1925(T14)1.8。『宗教及び文藝』創刊当時53歳。明治期から大正期にかけての日本のキリスト教界を代表する人物の一人。福音主義に基づいた教会形成事業に精力を傾け、後述する日本基督教会の形成と展開の中で指導的な役割を果たした。
- (2) 『宗教及び文藝』：植村正久が1911(M44)年1月23日に創刊した雑誌。以後発行日にずれはあるものの毎月一冊ずつ刊行され、第八号(9月22日発行)をもって通知無く終了。全号通して発行は福音新報社、発行兼印刷人は三松俊平、編集人は廣瀬魁一。定価一冊十五銭。尚、同誌は近年秋山憲兄の労によって新教出版社から復刻された(秋山編、2001)。
- (3) 1901～02年に海老名弾正との間に行われた福音主義論争を除くと、明治後半以降あまり論じられてきた主題がないといえる。例えば、大内の伝記では1908年以降はごく簡単に記述されている(cf. 大内、2002)。
- (4) とはいえ『宗教及び文藝』を中心に扱う以上、本稿で主に論究する「キリスト教」は植村正久と密接な関連を持つ一致教会や日本基督教団というプロテスタントキリスト教のある集団に焦点をあてるものであることを注記しておく。
- (5) 武田、2001
- (6) 尚、植村自身の文章には「文化」という言葉をほとんど見ることができない。これについては植村とほぼ同時代に生きた内村鑑三においても「文化」の使用が少ないことが指摘されている(cf. 原島、1971)。よって、本稿で分析に際して「宗教的なるもの」と「文化的なるもの」といった範疇を

用いる場合に、その切り分けは分析者の視点からなる便宜的なものであり、対象にとって自明なものではなかったことに留意されたい。

- (7) 『福音週報』(1890.3.14-1891.2.20), 『福音新報』(第一期)(1891.3.20-1895.5.31), 『福音新報』(第二期)(1895.7.5-1942.9.24: 植村は1925.1.8に没)。『日本評論』(1890.3.8-1894.9.19), 『宗教及び文藝』(1911.1.23-9.22)。

『日本評論』と『宗教及び文藝』の関係については、例えば前述武田の解説においても「『六合雑誌』、『日本評論』などにつながる性格もあるように思える」とされ(武田, 2001), また日本キリスト教歴史大辞典においても『宗教及び文藝』は独立項としてではなく『日本評論』項(鶴沼裕子執筆)において触れられており、『日本評論』における「キリスト教総合誌」としての位置付けを引き継ぐものだとされている。

- (8) 「日本評論の発行」『日本評論』1, 1890(M23).3.8。『日本評論』の性格について、鶴沼は文学の紹介、時事評論、キリスト教の弁証の三点を挙げている(鶴沼, 1969), また他には田代, 1979 参照。
- (9) 例えば社説には「政治主義に関わる管見(上) 個人主義と社会主義」・「政治主義に関わる管見(下) 国民主義を論じ併せて国粹主義に及ぶ」といった政治的な評論があり、その一方で「欧州の文学」という一連の論説ではユーゴー、トルストイ、カーライルなどが論じられている。
- (10) それ以外にも大江卓・尾崎行雄らも寄稿している。込み入ったものであったキリスト教徒と自由民権運動の結びつきについては土肥, 1994:II-5 等参照。しかしながら『日本評論』の創刊は基本的に自由民権運動「後」であったといえる。
- (11) 「凡そ基督教徒の徳を建て知識を進むるに有益なることを務めて怠らざるを期す余輩また社会の事物、風俗の利弊に注目し、経世済民の精神を以て、世間万般の事項を論究せんことを期す」『福音週報の発刊に付き一言す』『福音週報』1, 1890.3.14
- (12) 船尾栄太郎は植村の没後、『日本評論』を回顧して「明治二十三年頃当時一世を風靡した雑誌「国民の友」「日本人」に雁行して出された」(『植村正久と其の時代』3-461) と述べている。
- (13) もちろん、ここでこういった社会評論への姿勢が論じられていることと、直接に社会運動に参加することは別の次元の問題であり、この時期においては両者はむしろつなげられなかった。これについて木村は、政治的であることを思索するが故に、却って直接的な政治的行動から遠ざかるという、自由民権運動が終焉した段階での青年による政治的なものへの関与の仕方を論じている(cf. 木村, 1998)。
- (14) 大内, 2002:序章。
この内、第二期が何故(転回点として触れられる1905年ではなくて)“1908”年で区切られるのかについては不明瞭な点もあるが、後述するように『宗教及び文藝』はその後に出ているということを確認しておく。
- (15) 日本基督一致教会はオランダ改革派、北部長老派、スコットランド一致長老派を中心に1877年10月に設立された。後1890年12月の第六回大会において信条・憲法を改正して日本基督教会に改称した。
- (16) 山本編, 1929[1973]より作成。表中「n/a」は原本に数値が存在しないことを意味し、「未詳」は原本に未詳として記入されていたことを示す。
- (17) 1891(M24)年の日本の人口は約40,251,000人であり、日本基督教会の信徒数は0.0279%であるが、これが1890-1902(M23-M35)年間で最も多い。これが1898(M31)年においてはそれぞれ約42,886,000人、0.0247%になる。
- (18) 人口との比率は1902(M35)年にほぼ1891(M24)年の水準に戻り、それ以後日本の人口増加よりも良い上昇率で伸びてゆくことになる。
- (19) cf. 小沢, 1961

- (20) 例えば不敬事件に対しては植村正久「不敬罪と基督教」（『福音週報』1891.2.20：これによって『福音週報』は発行禁止処分を受けて終刊。引き続き1891.3.20に『福音新報』が刊行）、井上に対しては植村正久「今日の宗教論及び徳育論」（『日本評論』1893.3.4;4.8;5.13）等がある。
- (21) 本稿は『宗教及び文藝』の位置付けを考察するものであるため、以下都市教会としての日本基督教会に焦点が合わせられるが、明治中期以降の農村や地方におけるキリスト教のありかたはまた別の課題として取り扱われなければならないだろう。
- (22) 田代, 1973
- (23) 大内は植村が1883(M16)年3月に下谷一致教会を辞任してから、4年間の無任所時代を経て1887(M20)年3月に一番町教会を設立したことを「下町から山の手への意図的な移転」（大内, 2002）とする。
- (24) 井門, 1972:第二章
- (25) 山本編, 1929[1973]:343-344。尚, 明治期の日曜学校の展開について田村直臣が回顧している文章がある（『植村正久と其の時代』3-369-389。原文1933年『日曜学校の友』）
- (26) 井門はこれについて「プロテスタント信徒の社会的特徴、換言すれば、都市の中産知識層の性格は、[…中略…]すでに、明治後期から大正初期にかけて、遡及し実証しうる事実である」（井門, 1972）として、現代への連続性を述べている。
- これについては、実際に連続している面もあると考えることができ、またそういったキリスト教イメージが現代において一般的に流通していることも確かであるが、逆にいうならばそうではないキリスト教（会）のあり方には相対的に目が向けられてこなかったということでもあろう。
- (27) 広告『福音新報』808, 1910(M43).12.20
- 『宗教及び文藝』創刊前の『福音新報』における広告・記述を拾っておくと、801(M43.11.3)号の裏表紙に「月刊雑誌宗教及び文藝第一号11月中旬、福音新報社」とあり、802, 803号には言及がない。804号から807号までは未確認であるが、808(1910(M43).12.20)号の表紙に広告が出され、続く809(表紙), 810(12頁), 811(表紙), 812(表紙)号にも広告を見ることができる。
- (28) 柏井(当時41歳)、田中(当時43歳)、川添(当時41歳)については後述。石原謙(1882-1976)キリスト教史学者、当時29歳。斉藤勇(1887-1982)英文学者、当時24歳。南薫造(1883-1950)洋画家、当時28歳。高倉徳太郎(1885-1934)神学者・牧師、当時26歳。大谷虞(1869-1919)牧師、東京神学社設立当時の教授、当時42歳。小崎弘道(1856-1938)同志社校長・牧師、当時55歳。日野真澄(1874-1943)同志社大学神学部教授、当時37歳、後に日本ではじめてキリスト教教理史を書く（『基督教教理史』1917）。和田琳熊(1871-1944)昭和初期の同志社大学学長、当時40歳。
- (29) 両欄の記事中全85本中、約四割にあたる36本（その内32本が一号から三号まで）が無記名記事であり、執筆者の確定はできていない。
- それ以外の署名記事に関しては柏井と想定されるもの（「E.K.」「柏井生」表記）が22本と群を抜いて多く、続いて「T.T」表記の12本があり、これは内容的に田中であろうと思われるものを8本、田中あるいは高倉徳太郎の手になるものかと思われるものを4本含む。そして川添の手になると考えられるもの（「M.K」表記）が8本である。
- (30) 『柏井全集』第一巻冒頭に川添万壽得が寄せた「小伝」を参考にした。また他に日本基督教青年会同盟幹事として、1907(M40)年の万国学生基督教青年大会の開催に活躍したという。
- (31) cf. 川口, 1968
- (32) 『文明評論』文明評論社(1914-1920)。尚, 創刊号の発行人は田中達、編集人は柏井園であった。
- (33) 「保羅の神学と救拯の勢力」（一～五）『宗教及び文藝』1,2,4,7,8。
- 尚, 一「歴史上に於ける保羅の勢力」で問題意識及びパウロの神学が歴史的に「救拯」の力を持つものであったことを論じ、二「救拯の勢力の根底」ではパウロの神学の特徴を指摘する。続いて

三・四「耶蘇と保羅（上・下）」ではキリストとパウロの関係について論じ、五「保羅系の神学と個性」では（ヨハネ系との対比で）パウロ系の神学の系譜について述べている。

- (34) 「救拯と云ふは主として個々の心靈の救拯に相違はないが、一個人を救ふ手段としても又併せて社会を救はねばならぬ。少なくとも社会の局面を打破せねばならぬ。此の爲にも社会に対するプログラムを有する神学の必要は明である。』『宗教及び文藝』1:4
- (35) 柏井はクエーカーの「熱烈な信仰」に一定の評価を与えた上で、その神学の欠如に不満を述べている。cf. 前掲「保羅」論文（一）。
- (36) 柏井園, 1908「学生生活と宗教」（『書窓遠景』明道館）。ヘンリー・ドラモンド Henry Drummond, トマス・アーノルド, ニューマンに触れて、学生にとっての宗教のあり方を論じている。
- (37) 同上, p.110-111
- (38) 明治前半期における神と学術が世界の総体的な説明原理として即調和するという議論（例えば植村正久『真理一斑』1884。これは進化論によるキリスト教攻撃や世俗的な宗教不要論への対抗関係が執筆の背景にあり、世界の主宰神として万物の法則を司る神が論じられた）から、明治後半期における学術は道徳や美術と並んで宗教という領域よりも下位にあって包摂されるものとして捉える議論（例えば植村正久「宗教は果して迷信なるか」1903）へと両者の調和の位相を変化させてはいたものの、植村正久は一貫してキリスト教と学術の調和を主張していた。柏井の主張は当然後者の方により近い。
- (39) 山内季野の姉であるたまが志場家（田中達の父）に嫁いでいる。尚、田中の兄であり同様に仏僧であった志場邦雄もキリスト教を信仰するようになり、後に明治学院に進んで神学を学んだが、在学中に病没したという。cf. 『植村正久と其の時代』1
- (40) 田中達, 1909『比較宗教雑話』教文館。「宗教学界の三偉人」は1906年に横浜浸礼教会神学校で行った講演の訂正筆記だという。
- (41) 「序」『比較宗教雑話』
- (42) 「歴史上の釈迦と基督」『宗教及び文藝』3
- (43) 「宗教缺くべからず」『宗教及び文藝』7
- (44) cf. 田中達, 1915『神道管見』日本基督教興文協会, 田中達, 1917『日本の仏教』日本基督教興文協会
- (45) 田中達, 1911「姉崎博士の『根本仏教』を読む」『宗教及び文藝』2。問題としているのは引用の訳文など細かな点が多いが、姉崎のキリスト教理解を問題としている論点（p.9）は興味深い。
- (46) 田中達, 1911「井上, 堀氏合著 釈迦牟尼伝」『宗教及び文藝』7, 「批評及紹介」欄。尚、論者不明であるが、他に村岡典嗣の『本居宣長』であるとか、西田幾多郎の『善の研究』なども書評されている。
- (47) 田中がキリスト教の優越性を結論付ける論理自体には、新しく独自なものが見られるわけではなく、例えばキリスト教はより「文明的」であるといった修辞には明治初期から見られるキリスト教の弁証論の影響を見て取ることができる。もちろんこれは明治中葉における植村のキリスト教の弁証論がそうであったように、十九世紀的なキリスト教の弁証論からのつながりも想定することができる。cf. 星野, 2000
- (48) 川添万壽得「新約聖書の改訳に就て」『宗教及び文藝』2, 同「諸種の改訳英語聖書」『宗教及び文藝』6等
- (49) 「牧師の書齋に備ふべき近刊書」『宗教及び文藝』5
- (50) 明治後半期以降、植村の社会評論活動が消極的になっていったという大枠は先行研究で指摘されてきているが（cf. 大内, 2002）、本稿では『福音新報』における論説や大逆事件（1910年）の位置付けなど触れていない点が多いため、この問題を直接論じることはしない。
- 。ただ、国家権力等によるキリスト教に対する規制という従来指摘されてきた側面に加えて、宗教集団に何が求められ、また当事者達がどういった宗教を目ざしていたのかということの変遷にも

個別の事例に即して目を向けるべきではないかと考える。この意味で、本稿で取り扱った『宗教及び文藝』は当時のキリスト教の一つのあり方を映し出すものだと考える。

- (51) 植村を校長とする同校において、柏井は教頭、田中は教授、川添は講師であった。『宗教及び文藝』執筆者との関連で言うと、他にも大谷虞が初期に教授として教鞭を執っており、また石原謙、斉藤勇も後に教鞭を執る。また同校を卒業してまもない高倉徳太郎は、後に教授、そして校長になることになる。
- (52) cf. 佐藤, 1992
- (53) cf. 佐藤, 1992. 石原は上述。波多野精一(1877-1950) 宗教哲学者。
また他に、佐藤繁彦(1887-1935: 日本におけるルター研究の開拓者。東大大学院在学中に東京神学社に学ぶ)、征矢野晃雄(1889-1929: 神学者、哲学者。1910年に富士見町教会で植村正久から受洗)、山谷省吾(1889-1982: 新約学者、1911年に富士見町教会で川添万壽得から受洗)らが官学出身のキリスト教研究の代表者として挙げられ、佐藤はこの全員が何らかの形で植村正久から信仰上の指導を受けたと指摘している。
- (54) 今井の著作は『宗教及び文藝』4号で書評されている。
- (55) 『神学之研究』は聖公会の杉浦貞二郎が主幹となって1909(M42)年に創刊。『神学評論』は1914(T03)年に東京青山学院、神戸関西学院両校の神学科教授会によって創刊。『宗教世界』は1912(T01)年にバプテスト教会牧師の高垣勲次郎によって発行(バプテスト中央会館理事会発兌)。
- (56) 日本基督教興文協会 Christian Literature Society of Japan。1913(T02)年に総幹事にウェンライトが就任して創立された超教派の組織。前身は1900年の横浜の超教派の婦人宣教師の集い。1923(T12)年に関東大震災で焼失し、後教文館と合流。
- (57) 高倉の同論文は上篇が2号、下篇が3号に掲載されている。東京神学社に提出された卒業論文は『高倉全集』4巻373-513参照(cf. 斉藤, 1968)。
- (58) 三松, 1935:140-144
- (59) cf. 筒井, 1995
- (60) 『開拓者』5巻2号
- (61) 網島梁川の「見神の体験」(1904年)。また例えば清沢満之『精神界』発刊(1901年)、姉崎正治『復活の曙光』(1904年)、西田天香の一灯園開設(1905年)等。
「新仏教」運動の中心的人物の一人であった境野黄洋はこれらを「感情主義」であり、反理性的・反道徳的なものとして批判していたという(境野黄洋, 1906「思想界近時の変調」, cf. 福嶋, 1998)。これは「新仏教」運動が相対的により知的な性格を持っていたことを考え合わせなくてはならない。
- (62) 関岡, 1997;2000
- (63) 鈴木範久による今岡信一良への聞き取り「今岡信一良氏に聞く」鈴木, 1979

〔本稿は、平成十四年度文部科学省科学研究費(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。〕

- 秋山憲兄編 2001 『復刻『宗教及び文藝』』 新教出版社
- 井門富二夫 1972 『世俗社会の宗教』 日本基督教団出版局
- 鶴沼裕子 1969 「植村正久と『日本評論』」 『興文』1969.7
- 大内三郎 2002 『植村正久——生涯と思想』 日本基督教団出版局
- 小沢三郎 1961 『内村鑑三不敬事件』 新教出版社
- 川口善一 1968 「『開拓者』始末記」 『興文』1968.1
- 木村直恵 1998 『<青年>の誕生——明治日本における政治的実践の転換』 新曜社
- 斉藤勇 1968 「『宗教及び文藝』について」 『興文』1968（『復刻『宗教及び文藝』』に所収）
- 佐藤敏夫 1992 「第二章 一九〇七年（明治四〇年）—一九四五年（昭和二〇年）」 古屋他編，
1992 『日本神学小史』ヨルダン社
- 佐波亘編 1937[1976] 『植村正久と其の時代』復刻再版，全八巻 教文館
- 鈴木範久 1979 『明治宗教思潮の研究——宗教学事始』 東京大学出版会
- 関岡一成 1997 「綱島梁川のキリスト教受容（1）」 『神戸外大論叢』48-2
- 関岡一成 2000 「綱島梁川のキリスト教受容（2）」 『神戸外大論叢』51-5
- 武田清子 2001 「植村正久の『宗教及び文藝』——その伝道活動の一形態」 復刻『宗教及び文藝』新教出版社，2001
- 田代和久 1973 「都市教会存立の思想的背景——植村正久の場合」 『日本思想史研究』1973
- 田代和久 1979 「明治二十年代の植村正久——主として『日本評論』を中心に」 『基督教文化学会年報』25，1979
- 筒井清忠 1995 『日本型「教養」の運命』 岩波書店
- 土肥昭夫 1994 『日本プロテスタントキリスト教史（第三版）』 新教出版社
- 原島正 1971 「近代日本の文明と基督教」 『歴史における文明の諸相』東海大学出版会，1971
- 福嶋信吉 1998 「明治後期の「新仏教」運動における自由討究」 『宗教研究』316(72-1)，1998.6
- 星野靖二 2000 「文明から宗教へ——明治十年代から明治二十年代にかけての植村正久の宗教論の変遷」 『東京大学宗教学年報』XVIII
- 三松俊平 1935 『植村正久の思ひ出』 アルパ社
- 山本秀煌編 1929[1973] 『日本基督教会史』 改革社（山本秀煌編，1929『日本基督教会史』日本基督教会事務所の復刻版）

Shūkyō oyobi bungei (Religion and Literature):
An Aspect of Christianity in the Late Meiji Era

Seiji HOSHINO

This essay examines the character of a Christian magazine called *Shūkyō oyobi bungei (Religion and Literature)*, founded in 1911 by Uemura Masahisa, a leading Japanese Christian of the Meiji era.

From 1890, Uemura devoted himself to organizing the Nihon Kirisuto Kyōkai (the Japan Christian Church), which achieved the status of a self-supported church in 1908. In the process of its foundation, the Church strategically concentrated on the urban middle class as a target of its mission work. It therefore attracted considerable numbers of urban youth, students in particular.

An investigation of the contents of *Shūkyō oyobi bungei* reveals that almost all of its articles discuss theological, philosophical, or religious matters. Furthermore, its news columns and book reviews are dedicated to intellectual issues of that time. This publication was thus more a scholarly journal than a popular magazine.

Scholars writing for *Shūkyō oyobi bungei* insisted on the existence of phenomena leading into and/or emerging from Christian faith. Kashiwai En contributed an article about affirming faith through research on religion, and Tanaka Tatsu wrote about being led to belief in Christianity through comparing it to other religious traditions. The influence of Uemura's ideas can be detected in these discussions of the relationship between academia and religion.

These assertions, however, should not be ascribed solely to Uemura's intentions. The influence of the magazine's readership, including students, and of social movements such as Shūyō Undō (the Personal Cultivation Movement) was also considerable. The position of youth in the Church was an issue of particular importance. While movements such as Shūyō Undō tended to stress the mystical aspects of religion, *Shūkyō oyobi bungei* insisted that research on religion based in rational investigation was crucial in acquiring faith.

The rational standpoint of this magazine should be viewed in relation to the fact that serious theological studies emerged at this time within Japanese Christianity. As the study of philosophy of religion also arose in this period, it can be postulated that there was a growing need for an intellectual explanation of religion.

It is therefore concluded that *Shūkyō oyobi bungei* was essentially a scholarly journal, and was a publication that, while influenced by Uemura's ideas on religion and the academy, served as a response to the intellectual and spiritual needs of the youth of this era.